

日本に於ける環境芸術の発展についての考察 — 芸術が環境にもたらす影響について —

吉野 祥太郎*

Consideration of the Environment Arts in Japan — An effect about environment by Arts —

Shotaro YOSHINO

要旨 美術館やギャラリーから、公共の場に展示の場を変えた「パブリックアート」「環境芸術」と呼ばれる作品について、自らの作品のコンセプトと制作時の現地との関係と交流を交えた研究報告とする。パブリックアートの持つ「場所性」「環境性」が社会との関わりの中でどのような役割と影響があるのか、また、この先どのような発展をしていくか。ここで述べる「環境芸術」とは、エコロジーなどと直接結びついたものではないが、環境に対する配慮の実践を促すモノとして芸術がどのように環境を意識させる存在になりうるか、社会における役割と機能を、地域文化・風土との関わり、具体的な実社会への反映という観点によっておこなうことによって、「場」に対する影響力、そこに関わる「人間」に対する影響が、現代の社会環境を形成する上で重要な役割となる事と考える。

キーワード：環境芸術 美術 インスタレーション

1, 肖像彫刻からモニュメントへ

日本ではそれまで各地で小規模に行われていたものの、80年代はじめから、公共の場（公園、駅、主要道路脇など）に野外彫刻が設置されるようになった。

それ以前は、街なかにある彫刻と言えば歴史に名を刻む偉人達の肖像彫刻や記念碑などが主な野外彫刻であったのに対し、景観の一部としてその場所の象徴となるモニュメント彫刻が増え始めた。

その後、パブリックアートという言葉が定着してきて、公園や公共性の高い建物の屋内外に設置されるものとして、モニュメント的な彫刻や、ランドスケープ・デザインなどが一般的なパブリックアートとして認識されて来た。

2, 環境芸術の概念と、その展開

しかしその後、日本国内で行われる、規模の大きな国際展と融合したパブリックアートは、美術館などのホワイトキューブの中では収まりきらない作品を発表する場として機能し始めた。後に、それらの作品が縮小化されもっと簡単な場で発表されるようになったのが、欧米諸国におけるオルタナティブスペースでの発表というものであり、そのような場を持たない日本においては貸しギャラリーがそのような役割を果たすという、少し矛盾した展開へと進んでいった。

それらの展開と平行して、大規模な公共建築や都市計画の中に建設費の一部を美術作品の設置にあてる「パーセントプログラム」がアメリカやヨーロッパで導入され、本当の意味でのパブリックアートが普及するに連れて、日本でもそれらの種類の作品が多く設置され、発展を遂げた。

しかし、それらの多くは景観を無視し始め、モニュメントという概念を失いつつあり、アートと

*よしの しょうたろう 文教大学教育学部非常勤

いう感覚からビジネス性の強いものと変化し始めた。また、作品の維持管理などの問題なども膨れ上がり、アートの設置に疑問が投げかけられ始めた。

その結果、パブリックに於けるアートの必要性、そのコンセプトが重視されるようになり、都市との関係が見直され始めたのだが(北川フラム氏 監修の「ファーレ立川」など)、公共の場に於けるアートの設置は消極的になり始めた。

3, そこからの展開

そして、このように都市論が盛んになるに従って環境芸術という言葉は広がりをもった意味として、すでに活発化しているエコロジーの視点をも取り入れた都市環境でも語られ始める。そうしたなかで現代アーティストにとっては、環境芸術という言葉のもと、単に自然の中で活動するのではなく「都市」と「自然」、そしてそこに住む人間とのつながりといったものを芸術によって表現しようとする試みが重要なものとなりつつある。

また、昨今では他方面からプロジェクト的なアートや、参加型のアートの増加、またアートをもっと一般的な開かれたものにしてしようとする時代の流れに伴い、パブリックなアートを発表する場としての美術館、国際展、それらが多様化することを迫られ、お互いの役割が交差し始め、その交差した部分が拡大して行くという傾向にある。地域住民とのコミュニケーションやコラボレーションを目的とした作品、公園などの公共空間を利用した作品の展開。(「ファーレ立川」と同じく北川フラム氏 監修「越後妻有トリエンナーレ 大地の芸術祭」)またそれらの空間を使ったパフォーマンスやイベントなども、パブリックアートのプロジェクトとして、その定義自体も拡大されつつある。

現代における"環境芸術"は、環境の魅力を増幅させて観客に環境への親しみを意識させるものである。例えば、環境教育というものが、最終的に環境に対する配慮の力を養う(実践を促す)と

しても、実践の土壌となる環境への親しみがなければ、行動の継続や発展性もない、そこで、"環境芸術"が環境の「美しさ」や「心地よさ」等を鑑賞者個々の感性に伝えることにより、環境と人間との関わりにおける意味を増幅させ、現実を意識させることによって深層に潜んでいる心理的意識を揺さぶり、現実に対する人間の責任にふれていく事を伝えることができるのである。



(1)

(写真1 「心の容積」 吉野 祥太郎)

4, 展望

そして近年では、ようやく、物質の豊かさより心の豊かさを求める声が大きくなり始め、恵み豊かな日本の環境を、我々の世代だけのものと考えずに、生産活動の基盤としての役割に加え、豊かな感性と健全な価値観の育成等、精神活動の基盤として確実に次世代に引き継いでゆくことが求められている。

そのような意識から、環境芸術の、社会における役割と機能を、社会との関係性や、地域文化・風土との関わり、具体的な実社会への反映という観点によっておこなうことによって、「場」に対する影響力、そこに関わる「人間」に対する浸透力を実証し、現代の社会環境を形成する上で重要な役割を果たしていくのである。

5, 私の仕事

このように社会と都市、それらを取り巻く環境と、芸術のつきあい方が変化して行く中で、私が作品を介して関係する社会とのつながりを紹介させて頂く。

まず、私が初めて環境との関係を作品の大きな要素としてとらえ始めたのは、2006年に行なわれた「横浜の森 美術展」である。その会場は、住宅地の中に広がる手つかずの森と丘へのアプローチとしてそこに作家が滞在し、森と対話しながら制作するというコンセプトである。

そこで私が見たものは、会場の一部に敷きつめられたウッドチップである。一見そのウッドチップは自然物でもある為に、森には何の影響も及ぼしていないようにも見えるのだが、明らかに外界から来た招かざるものである。ウッドチップの層を見たときに私が想像したものは、海に流れ込んだ石油のようなものであった。このウッドチップの下には石油の下の海水の様に、きれいな土が堆積しており、今までの長い年月で養ってきた歴史を含んでいる。

私は、その表面のウッドチップを無視して、その下にある美しい歴史を汲み上げる事にした。そこで、地面に舟の形の穴を掘り、そこにコンクリートを流し込むことによって地面に堆積した美しい時間を、コンクリートでできた舟の側面に、まるで、海に浮かぶ舟の側面にそこの動植物（フジ



(2)

ツボなどの貝類や、微生物からなる藻など) が張り付き、水の中の時間を感じさせるような作品を、制作した。地面の下にある美しい歴史を、ダイナミックな方法で表に露出させるとともに、その歴史をやさしくすくい上げる様な作品をイメージしている。



(3)



(4)



(5)

(写真2・3・4・5「その土地の土を汲む」吉野 祥太郎)

また、その後、海外の野外展覧会に招待されることがあり、その会場でも同じ手法を使って作品を制作してきた。

その会場は日露戦争の時の要塞が残る島で、



(6)

(写真6 港には何艘もの軍艦が停泊している。
Vladivostok , Russia)

現地に到着した翌日から、会場となるその島に入りさまざまな歴史的背景の話聞いた。実際に、その話の中で出てくる敵とは私たちの祖先のことであり、その敵を迎撃する為の要塞であり、その為の開拓された島でもあった。実際にそこで戦闘が行なわれることはなかったが、想定された日本軍の侵略の為に様々な作戦のもと、要塞の開発が行なわれ訓練が行なわれた島である。



(7)



(8)

(写真7.8 島に残された要塞。この島は数年前までは、軍事秘密とされていて日本人はおろか、ロシア人も立ち入ることが禁止されていた。Rusky Island , Vladivostok , Russia)

その島の歴史を聞いた私は、ロシア側から準備された少ない予算にも関わらずどうしてもその土地の歴史を汲み上げることを実現したくなった。

しかし、その地面はとても固く、まるでその歴史を掘りあげることが拒んでいるようだった。現地のヘルプスタッフの多大な協力のもと、地面から次々と出てくる大きな岩の隙間から、様々な軍人の持ち物が発掘された。それらの歴史を含んだ発掘物を作品の中に内包し、歴史を大切に包み込んだ作品を作り上げた。

(次項 写真9 ~19, 作業工程の写真参照)



(9)

(写真9 岩がごろごろとする地面を掘り、強度を上げるための鉄のフレームをいれたところ.)



(10)



(11)

(写真10・11 たくさんのスタッフの助けにより着々と完成に近づいていく.)



(12)



(13)

(写真12・13 これは4本足だが、三又というものを立ててその頂点からチェーンブロックを垂らす.)



(14)



(16)



(15)



(17)



(18)

(写真 14~18 作品の引き上げから完成まで.)

以上にあげた二つの作品は、上に記したようにその土地の歴史を内在する作品として、そこに鑑賞者の興味を向かわせることで、「場」に対する影響力、そこに関わる「人間」に対する浸透力を実証し、環境と人間との関わりにおける意味を増幅させ、現実を意識させることによって深層に潜んでいる心理的意識を揺さぶり、現実に対する人間の責任にふれていく事を伝えることをコンセプトとしている。